
 ニ ュ ー ス

日本の火山活動概況（2008年7月～8月）

気象庁

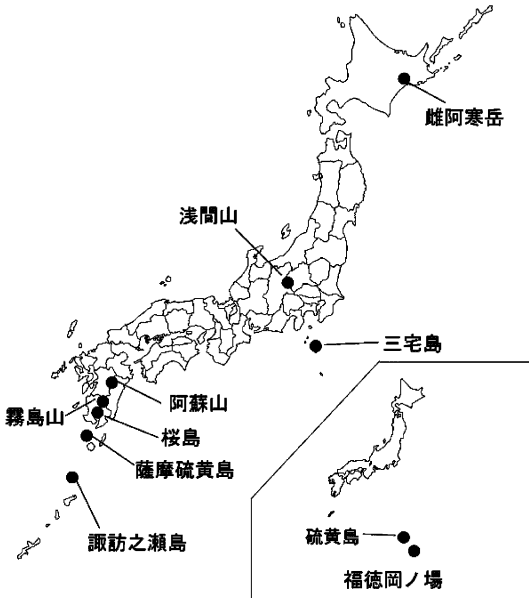


図 1. 2008年7月～8月に目立った活動があった火山

浅間山 (36°24'23"N, 138°31'23"E)

8月8日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表し、噴火警戒レベルを1（平常）から2（火口周辺規制）に引き上げた。

8月10日、11日及び14日にごく小規模な噴火が発生した。いずれの噴火でも、噴火に伴う空振、山麓及び山腹の道路や居住地域での降灰は観測されていない。10日に群馬県の協力により行った上空からの観測では、火口底の地表面温度分布等に特段の変化はなかった。浅間山が噴火したのは2004年10月28日以来であった。

火山性地震は、7月頃からBL型地震のやや多い状態が続き、8月5日以降はさらに増加する傾向が認められた。また、火山性微動もやや多い状態が推移した。なお、震源の浅部への移動等の変化はみられなかった。COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測では、7月は一日あたり100トンとやや少ない状態であったが、ごく小規模な噴火が発生した8月10日以降、一日あたり1,100～2,900トンと多い状態が推移した。これは2004年の噴火活動後に観測された量と同程度である。

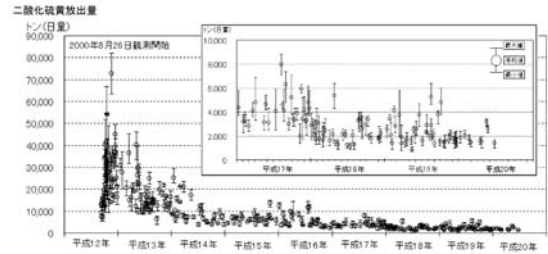


図 2. 三宅島 火山ガス（二酸化硫黄）放出量の変化（2000年8月～2008年6月）

8月9日以降、夜間時々高感度カメラで微弱な火映が観測されている。

山体周辺のGPS連続観測では、一部の基線で7月初め頃からわずかに伸びの傾向がみられる。傾斜観測では、火口直下浅部へのマグマ上昇を示す変化は認められない。

三宅島 (34°05'37"N, 139°31'34"E)

期間中、島内でCOMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測を3回行った。その結果、二酸化硫黄放出量は一日あたり1,300～2,600トンで依然として多量の火山ガス放出が続いていた。また、三宅村の火山ガス濃度観測でも山麓でたびたび高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

火山性地震は増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。発生した地震のほとんどがやや低周波地震（約3～10Hzが卓越する地震）で、高周波地震（約10Hz以上が卓越する地震）も時々発生した。震源はいずれも山頂火口直下浅部と推定される。8月には振幅のごく小さな火山性微動が時々観測された。

山頂火口の噴煙高度は火口縁上100～200mで推移した。

全磁力観測では、火口直下の熱帯磁が鈍化しながらも続いている。

GPS連続観測では、山体浅部の収縮と深部の膨張が継続している。

硫黄島 (24°45'03"N, 141°17'20"E)

海上自衛隊の協力を得て行った7月29日の上空からの観測及び7月30日の現地調査では、摺鉢山、阿蘇台陥没孔、井戸ヶ浜、漂流木海岸、北ノ鼻付近、離岩温泉跡、金剛岩付近及び元山硫黄ヶ丘などで地温の高い領域や

100℃前後の噴気が確認されたが、2006年11月28日の調査結果と比べて状況に大きな変化は認められなかった。

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によると、地震活動は落ち着いた状態で経過している。一方、国土地理院の観測によると、2006年8月以降みられている島全体が隆起する地殻変動が継続している。

福徳岡ノ場 (24°17.1'N, 141°28.9'E)

7月5日に第三管区海上保安本部が行った上空からの観測により火山活動によるとみられる変色水が確認された。また、7月19日に海上保安庁海洋情報部が上空から行った観測及び7月29日に海上自衛隊の協力を得て行った上空からの観測では、変色水及び浮遊物は確認されなかった。

阿蘇山 (32°53'01"N, 131°05'49"E (中岳))

中岳第一火口の湯だまりの表面温度や湯量には大きな変化はない。中岳第一火口南側火口壁の一部の噴気孔では引き続き赤熱現象が確認されている。

孤立型微動の回数は7月末以降一日あたり200回程度から100回程度に減少した。火山性連続微動の振幅は小さな状態が続いている。

7月18日及び7月30日に行ったCOMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測では、二酸化硫黄放出量は一日あたり400～600トンで、やや少ない状態が続いている。

霧島山 (新燃岳) (31°54'34"N, 131°53'11"E (新燃岳))

8月22日に火口周辺警報 (噴火警戒レベル2, 火口周辺規制) を発表し、噴火警戒レベルを1 (平常) から2 (火口周辺規制) に引き上げた。

8月22日16時34分頃に噴火が発生した。この噴火に伴い発生した振幅のやや大きな微動は、22時25分頃まで続いた。現地調査では、小林市から高原町にかけて降灰を確認した。

8月24日に行った九州地方整備局及び宮崎県防災救急航空隊の協力による上空からの観測で、新燃岳の火口内の南側及び火口外の西側斜面に複数の新しい火孔や割れ目 (長さ300～400m) が確認された。火口外の西側斜面には弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口縁から300m付近まで確認された。噴火後は火口縁を超える噴煙が観測されており、火口縁上100～700mで推移した。

火山性地震は、8月19日以降多い状態で推移した。発生した地震のほとんどはB型地震で、新燃岳直下の浅い所 (深さ0～1km程度) を震源とするA型地震もやや多

い状態で推移した。

新燃岳の南東約4kmに設置している傾斜計では、8月22日の噴火時に傾斜ステップを観測しており、新岳火口方向へ下がる変動を記録している。

桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

昭和火口では、7月は噴火が10回発生し、爆発的噴火は28日10時10分の1回であった。この爆発的噴火に伴い、大きな噴石が4合目 (昭和火口からの水平距離は概ね800～1,300m) まで達し、噴煙は火口上3,200mの高さまで上がった。火砕流の発生はなかった。このほかごく小規模な噴火も時々発生した。8月は10日に爆発的噴火が1回発生した。

南岳山頂火口では、7月5日および8月23日に爆発的噴火が発生したほか、ごく小規模な噴火が時々発生した。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測では一日あたり500～1,000トン前後とやや少ない状態で経過した。

火山性地震及び火山性微動は少ない状態で経過している。

国土地理院のGPS連続観測では、始良カルデラ (鹿児島湾奥部) の地下深部へのマグマ注入による膨張が続いている。傾斜観測では、3月中旬から山頂方向が上昇していると考えられるわずかな変化が継続している。

薩摩硫黄島 (30°47'35"N, 130°18'19"E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動は依然としてやや活発な状態が続いており、噴煙高度は火口縁上概ね400mで推移した。

火山性地震はやや多い状態が続いている。発生した地震の多くがB型地震で、A型地震も時々発生した。火山性微動は観測されなかった。

諏訪之瀬島 (29°38'18"N, 129°42'50"E (御岳))

爆発的噴火が時々発生したほか、小規模な噴火も発生した。十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、集落 (御岳の南南西約4km) で降灰が時々確認された。

火山性地震及び火山性微動は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いている。

(お知らせ) 最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

URL http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm

(文責: 気象庁地震火山部火山課 飯野英樹)